

PHD LETTER

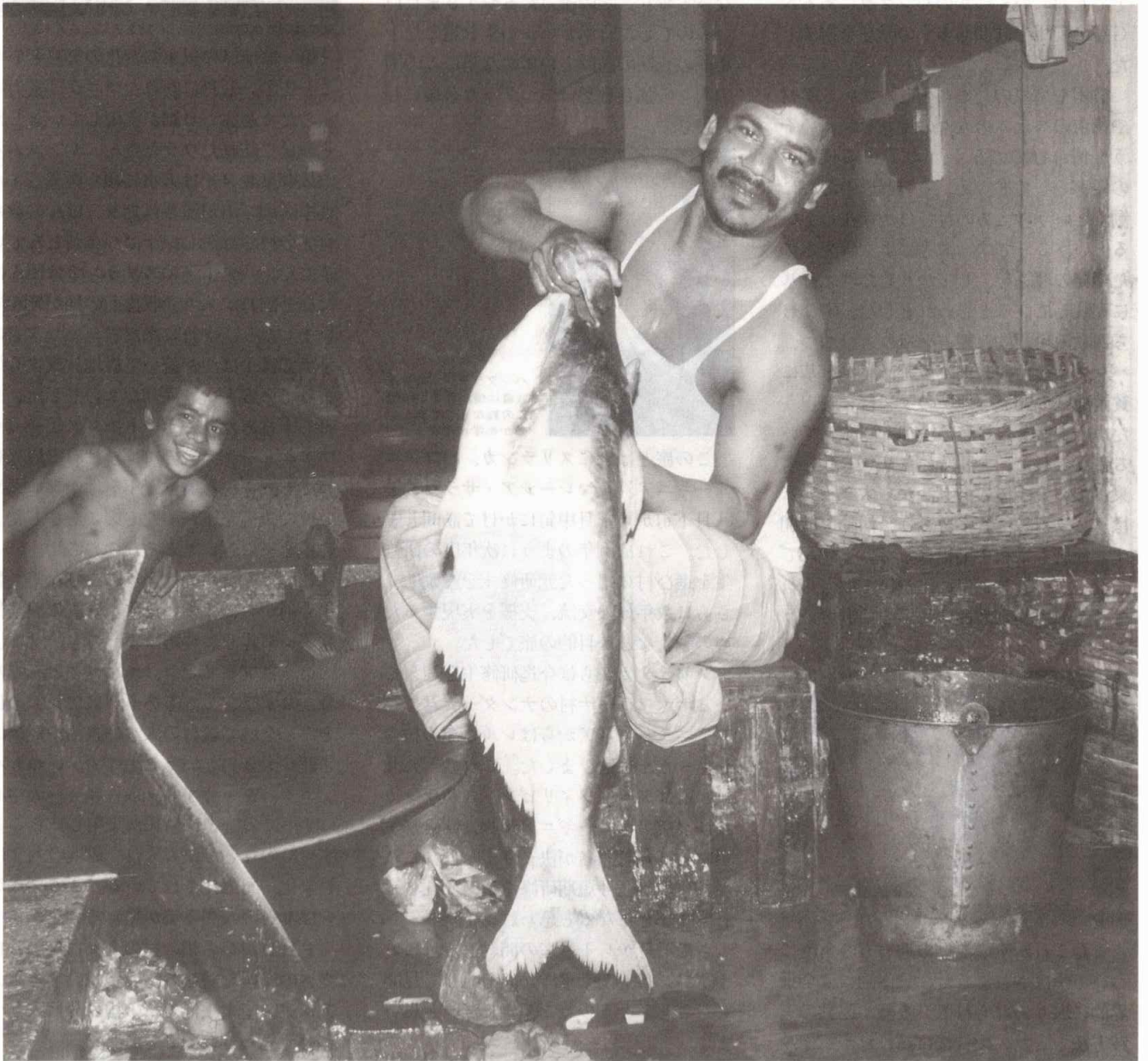
37

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1990・12

インドネシアレポート 3P
第8期生レポート 4P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草地賢一
住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
郵便振替:神戸1-29688 財団法人ビー・エイチ・ディー協会
定価:100円



バングラデシュの市場にて

かつて黄金のベンガルと呼ばれた地、バングラデシュ。
首都ダッカの市場を訪ねた。
雨期の恵みは魚。市場の人々に笑顔を与えている。
その向こうに漁師の誇らしげな顔と
今日の稼ぎに喜ぶ家族の姿が
だぶって見えた。

草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

去る八月二日、十年ぶりにバングラデシュを訪問しました。関西のNGO（非政府団体）の有志が進めている開発教育推進セミナーが実施した「学校教師のためのスタディーツアー」の引率ということでした。いくつかのバングラにあるNGOの現場を訪問し多くの学びを得ました。

貧困や病気のために苦しんでいる農村や都市のスラムの人々の現状をかわいそうと憐れむのではなく、「生存する権利」の侵害としてとらえ、その解放のために働くという考え方のNGOが存在しているということです。彼等はよく研究された開発の理論を、しっかりした理念を基に実践していると思われました。すなわち西欧の科学的な観方を取り入れつつ、バングラ社会の歴史、伝統、文化を基に貧困地域の開発を地域の民衆自らが担うための支援をNGOの役割と認識しているようでした。と同時にキリスト教を名乗っている団体でありながらスタッフにはイスラム教徒が多数おり、活動を展開する地域も宗教を前提にしていまませんでした。いつもアジアに出かけて教えられることは、異宗教間の対話と共働ということでした。



スリランカの来年度研修生ナンダーナさんと第6期アジヤンタさん(右)

またこれからの活動の進め方の角度について学ばされました。具体的には全世界的に取りあげられている識字運動の実践方法でした。数日後に訪れたネパール

私もちよつと世界を斬る!

「寄付するということ」

N.A.(京都府・学生)

南北問題に興味を持つ僕は、いくつかのNGO（もちろんPHDも含む）を訪れ、話を聞かせてもらってきたけれども、一度もNGOに寄付したことはなかった。

草の根の動機づけ～生存権からNGOへ

で見た識字教育と対照的に、字を識らないことで自らが何を奪われ、それは誰が奪っているのか、つまり貧困の構造を理解することによって奪われたものを取りかえす識字能力を身につけようとする動機づけの観点でした。

雨期のバングラは文字通り国土が海になっており、その湿気たるやすまじいものでした。激しいかわきを覚えた十年前の乾期の訪問との極端な差にこの国の人々の強さを想いつつダッカを後にしたのです。



バングラデシュの農民教育に使われている絵。この絵からなぜ貧しいのかを学んでゆく。

この旅とは別にスリランカ、パプアニューギニア、東マレーシア・サラワクを八月下旬から十月中旬にかけて訪問しました。これは例年のように次年度の研修生を選び村に帰った元研修生を激励し、さらに数年後の交流、支援を実現するための調査などが目的の旅でした。

スリランカからは今年研修生を迎えているボヤワラーナ村のナンダーナ君、パプアニューギニアからはレルさんの村のラニーさんを選びました。これで一九九一年度はタイ、フィリピン、スリランカ及びパプアニューギニアから長期研修生男女各二名計四名が決まりました。これ以外に来年度も短期研修生が四、五名来日することになると思われます。

さて三月から十月迄の間約三カ月におよぶアジア、南太平洋訪問を通じて見聞したことをもう少しご報告したいと思います。

理由の1つめは、寄付よりも自分達の生活の中で、小さなライフスタイルの転換をすることの方が大切ではないか、と思っていたから。2つめは責任という観点から。毎日の裕福な生活へ罪滅ぼしのために寄付をしたり、あるいは、寄付したことで自分の責任分が終わったなんて思ってしまうことが結構あるんじゃないだろうか。現実問題として、どんなお金



来年度研修生選考に加わる7期生トニーさん(左)

第一は地球の気象の変化の実感ということ。七月に訪れたマニラは電力不足のため週休三日制が実現していました。その足で訪れたワラヤさん、サンコム君の故郷東北タイは天水に頼る農業ですが、集中豪雨で田が流されたり、ほんの数キロ先の村では激しい干ばつに苦しんでいました。八月下旬のスリランカは田んぼにひび割れが入り、収穫前の稲が死んでいましたし、十月に来たアジヤンタ君の手紙では干ばつが続いて農地放棄すら始まっているという深刻なものでした。九月二十日あたりのポートモレスビー（パプアニューギニアの首都）は有史以来初めてセーターを着、靴下をはかないと寒い位に気温が下がったとのことでした。赤道直下に近いところなのにです。

このような傾向は今年のみでなく、数年も前から続いています。確実に異常気象が恒常化しつつあるようです。

第二はフィリピン、ネグロスのみでなく、スリランカでもあるいはアジアのほとんど全域で農村の人々の政治、経済的苦難が大きいということです。いつもバンコク、ジャカルタ、トーキョーの中心にすべての権力、情報が集中し、そこですべてのことが決められ、辺境の人々は対象化、周辺化されている。この図式からは本当の人間の姿が見えてこない。

PHDが草の根の村の人々に対する自立への支援を続けることの意義を今年もアジア、南太平洋の草の根に分け入りつつ強く思わされたことでした。

であろうともNGOの活動資金になるのだから、それもいいのかもしれないけれど、お金を出すということは、そのNGOの活動に責任を持つことだと思ふ。責任を持つ以上、そのNGOの活動を理解し、常に知ろうという姿勢を忘れてはいけない。最近初めてNGOに送金し、自分のしたことの責任の重さに戸惑いながら、自問し続ける毎日です。

'90インドネシア・スマトラ フォローアップ&スタディーツアー報告

緯度0度の漁村を訪ねて

今年で5回目となるインド洋に面したスマトラの漁村への旅。ユリ、アリ、アフナル、ペディ、ファイジン君を激励に8月下旬、でかけました。今回は研修生の指導をされた兵庫県香住町の吉岡修一さん、同じく家島町の中村庄助さんのお二人の日本の漁業者を中心とした9日間でした。

よしおかしゅういち 吉岡修一(兵庫県香住町・香住漁業協同組合長)

89年5月にファイジン君とペディ君の研修を引受けた。この夏、村へ帰った研修生の村を訪ねてほしいとの要請がありスマトラを訪ねた。現地の漁業状況を見、いくつか気付いた点を助言してきた。

18頁のレポートを編集部で要約させていただきます。

<バシルバラー村で>

1. 港づくりの必要性 漁業振興には港が不可欠と説くが、資金がなく、政府もとりあげてくれないとの返事。
2. 船型の改造 現状のカヌーでは危険で、効率も悪いと指摘したが、完全な理解は得られず。併せ救助胴衣、シーアンカーについても説明した。
3. ひとつの説明をくり返し、やっと理解してもらった（言葉の違いではなく）。経験に頼るだけで、基本的な知識が不十分に感じた。教育の向上が必要だろう。
4. 地曳網と刺網の改良 浮子を増やし網の浮力を強め、イセを増し網成りを合理化することを説明したが、理解程度は?
5. 流通面の不備 力のあるなして同じ魚の売値がかわり、所得格差につながる。また魚種毎の漁期や量を把握していないため販路が弱い。ここでは漁業者の結束が理解の策と力説した。
6. エビ漁の漁具の改良 言葉ではうまく伝わらないので後日「籠」の図面を送ることを約束。

<アイルバンギス村で>

1. 集魚灯の改良 白熱灯を洗面器につけたものを使っているが、これで用が足りる漁業資源の豊富さに感心しながらも集魚効果を高める方法を指導。
2. 漁船に乗って 漁船の動力化、電気設備の導入、漁具、漁法の近代化など多くのことを考えたが、その資本調達が課

題である。
3. 船型の改良 こちらでは転覆防止に両側にヤグラ状のものが張り出ているがこれは、港ができた際には接岸のジャマになろう。
4. 鮮度保持 ここでは夕方出漁し、朝帰ってくるが、多くの船は氷を積んでいないようだ。浜から市場への輸送には使われているのを見たが、気温の高いこの地域では、氷の使用とともに輸送の迅速化も必要であり、船を直接、棧橋につけ、そこから陸揚げするもひとつの策だろう。また氷の安価供給、輸送容器にも改善があればと思う。



村の漁師に網の補修を教える吉岡さん(アイルバンギス村)

私の行く前の子想と村での漁業の実態に格差があり、即効性のある指導には成り得なかったかもしれないが、村の人々の何らかのヒントになってくれればと思う。

なかむらしょうすけ 中村庄助(兵庫県家島町・家島漁業協同組合長)

私が指導したペディ君をはじめ研修生たちが、日本で学んだことを村で生かそうとして、行動をはじめると、何がしかの障害がでてくるものです。これは日本の私にしても同じことがあります。その時は改めて原点に戻ってみることが大切です。

彼らの奮闘ぶりを見て、最低でも1カ月ぐらい現地指導ができたらと思ひ、また、PHDや地元の推薦者の先生たちとも相談をし、政府の協力を引きだして、地域のモデルになって欲しいと思ひました。

さかもとみちえ 坂本充智恵(兵庫県加古川市・高校生)

私が一番感じたことは、人々の心があたたかかったことです。村で折紙をはじめると、村の子がユリのふくらんだもの

を作ってくれました。折紙は日本だけとおもっていたので、こんなところでつながっているんだなと思いました。

たずみつお 田住満夫(兵庫県波賀町・元教員)
村の子供らが沢山集まって来たうじゃうじゃと集まって来た女子高生が
そんな子供たちと遊んでいる子供たちはやがて彼女に触りはじめお尻やそこらあたりに触り女子高生は驚いて嫌一つと悲鳴を上げる
子供らはいっそう手をのばしてくるイヤーツはヤーが馬鹿に強いのでヤーとしか聞こえない
ヤーはインドネシア語のYAでインドネシア語のYAは英語のYESで...まそういう次第であるからして彼女の悲鳴はいいわよ、さあさあどうぞと理解されていたのかも

てらおかずのり 寺岡一則(兵庫県播磨町・中学生)

アイルバンギスの村で無人島に行き、その白い砂浜、青い海が心に残りました。村では水道ではなくて、バケツで井戸水を汲むのがとても大変でした。

しばひさのり 芝尚徳(兵庫県三木市・中学生)

インドネシアの味は極端でした。紅茶やコーヒーは殆んど砂糖の味。オカズは唐辛子がたくさん。ヤキメシはピリッときてなかなかの味です。

しげたさこ 繁田聡子(兵庫県三木市・中学生)

この旅行で、日本に居るだけでわからなかった生活の違いを感じました。これから、外国語をマスターして、もっといろいろな違いを探し、その中で自分のできることを見つけれたらと思ひました。

はしもとけいたろう 橋本敬太郎(広島市・大学生)

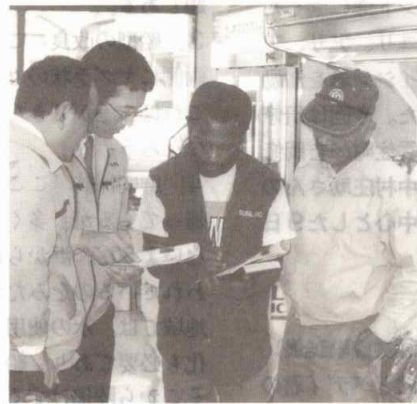
きれいな海、笑顔の子供たち。初めての海外がインドネシアだったが素晴らしいところでした。日本よりもずっと人間的な生活ができるような気がした。

やまはたひろや 山端宏弥(兵庫県加古川市・小学生)

日本はとってもぜいたくすぎると思ひた。なんでおんなじ人間なのにぜんぜんぜいたくがちがうんだろうと思ひた。

8期生レポート

ヘルペさん
(パプア・ニューギニア)



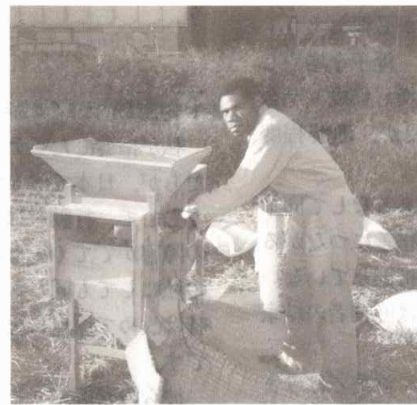
ハリマ農協で農協について学ぶヘルペさん

ハリマ一宮農協組合長・中尾卓巳さん宅に滞在し、営農指導の現場に同行させて頂き、農協の動きの一端を知ることができました。10月後半からは、昨年のタイツアー参加者で鳥取の会員で元気印の先生堀内さち子さんの働きかけから、鳥取県での研修が実現、ヘルペさんがお世話になりました。倉吉市で行なった交流会にも多数の方々から、PHDのネットワークが鳥取にも広がっていく気配です。後半の研修では農協に加え畜産が彼の課題となりそうです。

韓国比較研修→三谷康宅(兵庫・黒田庄町)→朝来ユネスコ協会講演→山田芳弘宅(兵庫・社町)→ふえろう村塾(兵庫・小野市)→明石ロータリークラブゲスト→上野中学校交流会(兵庫・神戸市)→ハリマ一宮農業共同組合(兵庫・一宮町)／中尾卓巳宅(一宮町)滞在→笹間正典宅(鳥取・日野町)→福嶋慶純(鳥取・倉敷市)→村上泰子宅、堀内さち子宅(鳥取・羽合町)滞在→鳥取会員交流会→清水直善宅(鳥取・倉吉市)→大阪元(鳥取・三朝町)→兵庫県商業教育協会スピーチコンテストゲスト→葺合高校交流会(兵庫・神戸市)

韓国から帰国してすっかり日本語を忘れてしまったヘルペさん。少しずつ日本語の坎を戻しながらの研修となりました。10月にパプア・ニューギニアから職員が持ち帰ったワニ皮の太鼓と腰ミノの伝統衣装が強烈に各地の交流会でも大活躍。彼が特に関心を示しているのはパプアでは組織されていない農業協同組合の動きです。10月には短い期間でしたが、

レルさん
(パプア・ニューギニア)



昔の農具「唐箕」を見つけました。多可郡藤本さん宅にて

韓国比較研修→三谷康宅(兵庫・黒田庄町)→但馬農業高等学校交流会→尾藤光宅(兵庫・日高町)→八木貞夫宅・安達一弘宅(兵庫・豊岡市)→ふえろう村(兵庫・小野市)→藤本敏孝宅・森野英樹宅(兵庫・加美町)→岸田豊正宅(兵庫・中町)→NGO大学・県有機農業祭ゲスト→大阪府寝屋川淡水魚試験場／岡本加都夫宅(大阪・寝屋川市)滞在→兵庫県商業教育協会スピーチコンテストゲスト→葺合高校交流会

3人の中では一番言葉の面で心配だったレルさん。というのも彼の場合、故郷では英語を必要としない環境だからです。そんな周囲の心配も何のその、独特のスマイルとジェスチャーで多くの困難もクリアし(?)、今や、日本語のうまさは3人の中でも一番。帰ってからも村の人々に日本語を教えたいと話すレルさんです。ホームステイでの御家族の方々との会話がやはり研修生の日本語学習をもちたえているのでしよう。

さて農業研修ですが、9月の台風が研修にも影響し、但馬では作業実習よりも農家の方々に経営方法について質問することが多かった様子。この後、同じ兵庫県内の多可郡、藤本敏孝さん、森野英樹さん、岸田豊正さんのお宅で野菜・米の収穫に励みました。作業を通して日本の昔の農具に興味をもった様子、これならパプア・ニューギニアでも使えそうと話していました。長期研修にむけて、これからの課題は稲作と植林、有機的複合農業経営。これらをつつこんで研修することになるでしょう。

ネストールさん
(フィリピン)



東門さん宅で作業に励むネストールさん

韓国比較研修→色作郎宅(兵庫・市島町)→山口勝弘宅(兵庫・南淡町)→ふえろう村塾(兵庫・小野市)→宝塚武庫川ロータリークラブ講話→東門畜産(兵庫・篠山町)→NGO大学・県有機農業祭ゲスト→久保賢一宅(和歌山・南部川村)→山崎智弘宅(和歌山・南部川村)→崎山光一宅(和歌山・広川町)→兵庫県商業教育協会スピーチコンテストゲスト→葺合高校交流会

ネグロスからの昨年度研修生ドミーさんに負けず劣らず力持ちのネストールさん。研修指導にあたって下さる農家の方々からはよく働き、細かいところにも気がつくとの評判です。作業をしながらもタガログ語の歌を口ずさんでいます。故郷の家でバナナ、オレンジ、スターアップルを始めたくさんの果物を栽培しているところから、淡路島南淡町山口勝弘さんのお宅、そして和歌山有田の崎山光一さんの

お宅で日本のみかん栽培を実習させて頂きました。みかんの剪定(花や実がよくつくようにしたり、木全体の形を整えたりするため木の枝の一部を切り取る)といった細かい作業はフィリピンでは全く行われていない点だと関心を示していました。今年の秋は台風が多く、山口さんのお宅に滞在した9日間に2つの台風が到来、「雨男」の名をとったネストールさん。今後の課題は養鶏を中心とした有機複合農業経営、植林、加えて生産者と都市の消費者のつながりといった分野が、帰国後の活動にも影響を与えるものとなるでしょう。

実り多い韓国研修

第四回目となる韓国比較研修は、今年の研修生3名に加え、PHDの研修生が日本国内でお世話になる指導農家から渡辺拓道氏(兵庫・丹南町)が同行され、これに職員中尾を加えた5名で訪韓。全体的な印象は、①年内に決まったウルグアイラウンド(農産物輸入自由化)受け入れに対する反対運動の激化②今年6月～7月にPHDが迎えた短期研修生のフィールドをたずねたことで韓国農民の中にもPHD理解者が増え、日本農民も含め韓国とアジア・南太平洋のPHD研修生のフィールドが広がっていくことを肌で感じる事ができた。という点に収斂される様に思える。渡辺氏のレポートから今回の比較研修を振り返ってみたい。

訪韓中いくつかの農業機関を訪ねたが、そのうち農村指導所(日本の農業改良普及所)と農協について報告したい。私達が案内された礼山郡農村指導所は示範圃(日本の展示圃)による指導が中心であるが、農閑期の講習会にはテーマを農民からの要求に応じて設定していることから農民の80～90%が参加するという。農協も日本と殆ど同じ形態であったが、驚いたことに昨年迄農協の役員は行政機関によって選出されていた。現在の民主的な農協も歴史が浅く、まだまだ力不足のようであった。一方農民団体の方は日本人にはなかなか理解しにくい存在だった。全国的な組織である「農民会」は兵庫県農業研究会がホストを丹南町でも受け入れた経験がある。私達がお世話になった「礼山農民会」のイメージは、お互いに情報交換を行い意欲的に農業に打ち込んでいた。現在は農産物輸入自由化反対運動がその活動の中心になっている。韓国の農村は、労働力を都市部にとられ、耕耘機が主流の農機具、狭い区画、水利税、経営面積が大きい



韓国農村の伝統芸能「農樂」を体験する研修生(洪城郡ブルム農高で)

くると割高になる固定資産税等、基盤整備が殆どできていない現状である。こうしたなかでの自由化は農村部に壊滅的打撃を与えることになるであろう。遅れた農協の組織化、急な工業立国を目指す政府の姿勢が、農民運動を大きくしたように見えるが、農民自身が主体となつての運動は研修生共々学ぶところが大きかった。韓国の農村の生活は、朝日をうけて立ち昇る農業に気分が悪くなるころから始まった。農民の80%が農業が原因で体の不調を訴えているらしい。希望的なことは、2カ所目の訪問地洪城で、ブルム農業高校とその卒業生が、有機農業を中心にこのような問題に取り組んでいることであった。

今年で何度目になるこのツアーだが、今回同伴させてもらいその目的が何であるかわかったようである。韓国の農業の現状が十数年、あるいはもっと前の段階にあること、しかし、厳しい状況におかれながらその段階での問題に真摯にとり組んでいる人に出会うことは、帰国後、研修生の活動の大きな支えになるに違いない。

帰国研修生短信

インドネシア

8月のフォローアップで5人の研修生の村を訪ねました。4期ユリ君は漁業振興協会職員、独身はかわらず、段々貫禄と落ちつきがでてきたようにみえました。5期アリ君は村でのグループづくりにとりくんでいますが、まだ成果をあげるには至っていません。吉岡、中村両先生から村の漁獲のデータを作ってみたらと助言をうけていました。6期ペディ君は帰国して太りました。毎日漁にでています。6期ファイジン君もトマスカップというグループの一員としてがんばっています。6期アフナル君はここしばらくパダンのAKBPという短期大学の日本文化研究センターのお手伝いをしており、それが終わり、村へ帰るとのこと。みんな元気で日本語もまだまだ大丈夫でした。(藤野)

タイ

インドネシアツアーの帰り、タイにも立寄りしました。東北タイの7期ワラヤさんにはカラシンで出会いました。今年の夏は雨がが多く、何度も畦が崩れ、最後には直すのをあきらめたので多分今年の収穫は少ないでしょうと言っていました。自分の田畑と農民協会の仕事で忙しいようです。その後、チェンマイにまわり、4期ブリチャーさんと奥さんに会い、日本のグループ「ソディー」が応援する布の件について打合せをし、3回目の発注をしてきました。布のグループと並行して農業のグループづくりにも取り組んでいるようです。(藤野)

スリランカ

4期ジャヤンタ君はコロンボの仕事を終えて村に到着しています。結婚はまだ…。5期ニーラニーさんは村の学校の教師。夫の中東の帰国待ち。現在夫の村に新居を建築中。6期アジャヤンタ君はグループの仲間6人と共に自立を目指して苦闘中。秀才の妹をなんとか医学部にやりたいと思案。難問山積の中、彼の性格に救われます。(草地)

パプア・ニューギニア

送り出し団体の責任者の話では「トニー君は、帰国後現場の動きに自信をもったようだ。」現在4人のスタッフを指揮して家畜の飼育に精を出しています。新妻のリンダさんの笑顔が印象的でした。(草地)

良きライバルにめぐりあえて

西村友子(但馬農業高校3年)

「外国人」という言葉聞いて、すぐに頭に浮かぶのは、サンコムさんの顔です。彼はタイのイサーン(東北タイ)から農業研修生として昨年、日本にやって来た青年です。海外農研に入っていた私は、昨年の6月に初めて学校の先生の紹介で彼に会いました。



今年の研修生と但馬農高生との交流会では、西村さんのご自宅でお世話いただきました。

第一印象は、気のいいお兄ちゃんという感じで、思わず微笑んでしまうほど、笑顔が素敵な人でした。もしも、タイから来たのだという説明を受けてなかったら、きっと日本人だと信じて疑わない位、日本人っぽい人でした。

彼は、村の代表として日本の進んだ農業を勉強しに来たのですが、自覚していないのか、人柄なのか、いつもニコニコして少しまじめという感じがありませんでした。もしも、私が彼と同じように異国の地に代表者として送り込まれたらプレッシャーに押しつぶされて、終始、しかめっつらで毎日を送った事でしょう。天真爛漫な彼の姿に驚かされながら、彼の国の話をいろいろ話してもらい、日本がいかにか恵まれた国であるか改めて自覚しました。数日後、彼は来日目的の日本の農業を学ぶため、農家に入りました。その後、なかなか彼に会う機会がなく顔を見る事も出来ないまま半年が過ぎました。

半年後、彼に再び会った時彼のあまりの変わり様に目を見張りました。初めて会った時の気のいいお兄ちゃんという感じはなく、精悍な顔つきの一人の男の人になっていたのです。もうすでに日本人っぽさは消えて、タイ人としての誇りをもった一人の人間に変わっていたのです。なにが彼を変えたのでしょうか。毎日、ただちゃんぽらんに何も考えず生きている私には、とうてい分かりっこない事かもしれません。でも、彼を変えた何かを理解できれば、私も今の幼稚さを越えた大人になれるのではないかと。変ぼうした彼を見て強くそう感じたのでした。

最近になって、彼を変えさせた何かの一部を理解出来たのではないかと思います。

日本に来たばかりの彼は、日本の良い面ばかりを見すぎて、日本は素晴らしい。こんな良い国の人間は、うらやましい。強くこんな風に思っていたのではないのでしょうか。そんな考えが、タイ人としての誇りを失い、どこか日本人的な感じをもった人間を作り出していたのではないかと思います。しかし、数カ月の間日本に暮らしてみても、日本の悪い所、ある面での貧しさや粗悪さが分かってきて、日本への強いあこがれが消え、しだいに母国タイの素晴らしさを理解した彼は、自分か改めてタイ人である事を自覚し、それを誇りに思いはじめたのではないかと、そう思います。そして、自分の村の代表者であるといった責任の重さを感じて、農業技術をすべて修得するような前向きな姿勢に変わっていったのではないのでしょうか。ひょっとすると、日本の技術的に優れた所をすべて吸収して、タイに持ち帰り、タイを日本以上の大国にするやろう。という野望を心に描いていたのかもしれない。実際彼は、数々の農業技術を身につけて、今年三月、母国タイへ帰っていきました。

彼の姿を見て、私は劣等感を持ちました。今の日本人、特に私達学生は、彼のように自分の国や村の向上のためになにか努力しているのでしょうか。それを考える事さえしていないように思います。彼の

「イキイキ自己発見」

林真菜(神戸市・学生)

時々ふと、自分の存在感というものに気がなりませんか?『自分』という存在を他人に伝える時、どのように説明しますか?

まずは、名前を名乗り、学生ならば通っている学校を、社会人ならば勤めている会社...etcといった具合に順に挙げていくでしょう。このように考えると人間は、いくつもの大小様々な集団に所属し、それがひとまとまりになって一人となっていると言えるのではないのでしょうか。また、自分を変えたいと思う事はないですか?知らない世界を覗いて、新しいもうひとりの自分を発見したい。そんな好奇心は誰もが少なからず持っているはずで、ワンステージしかない人生のなかで、いくつもの役を演じ、自分というものを創りあげてゆく。そこからライフ・スタイルというもの生まれます。いかに何役をこなし、自分に多面性を持たせるか。それに空いた時間をどれだけ有効に使うかが大切になってきます。家

ように目的をもって物事を学び、有意義な生活をしているのでしょうか、ただ、受験の為のみに学習し、何も考える事なく無気力な日々をおくっているのではないのでしょうか。少なくとも今までの私は、そうでした。こんな無気力日本人が行きつく日本の将来は、滅亡しかないかもしれません。しかし、充実した日々を送っている、彼と彼の国の人々の未来は、明るいものです。彼らの熱意と気迫は、日本など足元にも及ばない位素晴らしい国を作りあげる事でしょう。途上国に日本が負かされる日も近いのです。

実際、今でも、人間の質では、彼らのほうが数倍優れています。頭でっかちのコンピューターは、考えるあしに負けているのです。

私は、日本人としての誇りにかけて彼らに負けたくありません。途上国の彼らをいいライバルとして、日々、向上を志したいと思います。日本を素晴らしい良い国と他国人達に心から感じてもらえるように、私は一人の日本人としての責任をとって日本向上のために頑張りたいと思います。もしも、やる気をなくすような時が来たら、ライバルの彼を思い出して再び競争心をもちたいと思います。

いいライバルと知り合えて本当にラッキーでした。

—本作文は国際協力事業団主催、平成二年度高校生エッセイコンテスト入選作です。

庭を離れ、もうひとつの場として、集まる人達とのお喋りや情報交換が楽しみで、PHDにボランティアで参加されている主婦の方たちもいます。

いろいろな人と出会い、沢山の情報を吸収すると「賢く」なった気がしませんか?自分を磨くためにもこのような場は必要だと思います。

PHD運動もこうした、人と人との触れ合いから始まり、広がってゆくものだと思います。海を越えたアジアの人達と自分が、何らかの形でつながっているとさえ思えば素敵ではありませんか。

生き生きしている人というのは、自分が楽しむ術を知っているのです。楽しい事を考えると自然と顔がほころぶものです。暗い事を考えると表情も曇ってしまいます。今一度、自分のライフ・スタイルというものについて考える余裕を持ってみてはどうでしょうか。今迄知らなかった自分を発見して、そこから新しい輪が広がるかもしれません。

PHD NEWS

会費・御寄付寄託状況

1990年	8月	153件	1,805,557円
	9月	74件	1,087,469円
	10月	99件	13,779,426円
		計326件	16,672,452円

以上の通り、多くの皆様より会費と御寄付を頂戴致しました。ご協力いただき深く感謝申し上げます。

「アジアの草の根ネットワーク」発刊

70年代後半から日本でも自発的にボランティア活動をする人々のグループが出てきました。この本は、一昨年、神奈川で開催されたアジア市民フォーラムの報告書ですが、「草の根の海外協力」を考える上での色々な問題・課題をまとめたもの。PHDの事務所でも販売中。学陽書房刊。定価2,000円。

「今年も参ります、西日本研修旅行」

—東日本のあとは西日本。西日本でPHDを御支援下さっている皆さまにお目にかかりに研修生と職員が邪魔します。いよいよ佳境に入る研修での経験や自国の村のことなど研修生からぜひ直接聞いていただけたら...訪問、交流会を希望される方、御連絡下さい。また同行者も募集中、御一報お待ちしています。

時期：'91年1月下旬～2月中旬
予定コース(車で参ります)神戸～北九州～筑豊～福岡～熊本～水俣～長崎～諫早～有田～広島～福山～倉敷～岡山～神戸

訪問者：第8期研修生3名、職員
内容：研修生の話、現地のスライドを用いた交流会。研修生に役立つ見学、また宿泊等お願い致します。

○月×日のPHD協会

総主事・草地 前々号で腰痛持ちと報告したが、最近は肩コリを訴える。プロのマッサージ師もお手上げの重症とか、原因は激務?職員によるイジメ?老化等諸説有。肩モミ特別ボランティア募集中。

主事・藤野 出張が続き、久しぶりに帰宅した翌朝、事務所にてかけるときに、3才の子供から「また来てね」と言われ、ショック大。アジアの村から学ぶべき精神的豊かさの非実践の一例に反省しきり。

主事補・中尾 各地の交流会での今年の

感謝・各方面からご支援

この秋、全日本自動車産業労働組合総連合会、兵庫県婦人会館ユネスコ基金より、多額のご支援をいただきました。またスマトラの舞踊団「インドジャティ」公演には兵庫県国際交流協会、神戸国際交流協会から助成をいただきました。ご期待に答えなくてはと決意も新たにす。

タイの布の織手を訪ねるツアー計画

布の支援グループ「ソデイ」の企画で91年4月上旬、に北タイの草木染、手織りの布を作っている婦人を村に訪ねる旅を計画。約1週間の日程で、10人位で費用は18万円を考えています。詳しくはこれから決めていきます。興味のある方は、お早めにお問い合わせ下さい。

今年もトレーナーができました!

今年度版はTシャツに引き続きアジア・南太平洋11言語による「生きることは分かち合うこと」をプリント。収益は研修生支援に用いられます。



カラー
サーモンピンク
マスタード
ダークグレー
霜降グレー
定価3,500円
サイズM・L・LL

9月10～12日毎日新聞大阪本社版家庭欄、10月11日NHKおはようジャーナルでPHDがとり上げられました。コピー、ビデオ貸出希望の方はPHDまで。



朝夕はひときわ冷えこむ頃となりました。会員の皆様いかがお過ごしでしょうか?89年度タイスタディーツアーに参加した松本祐子といます。はじめまして。

9・10月とムシキー村から新たな布が届きました。絆や様々な味わい深い模様、配色が入り、布のバリエーションが増えたように思います。各地14のバザーにも呼んで頂きました。クロス状の小物も売れたようです。何げなしにそれらを見てくれたり、買ってくれたりした人々が、どんな人がこの布を作ったのかとか、草木染めって変わっているけどなんか親しみを感じる布やなという風に、少しでも興味を持ってくれたら、非常にうれしいです。

9月末にセニヤキというカレンの村に1年間滞在された広島会の会員で文化人類学者の三野洋子さんが来訪し、女性の暮らしと布の結びつきなどお話を伺いました。ほんの数日滞在した私達とは違い、生活してみなければ分からないといった事ばかりで大変興味深いものでした。

また12月末にタイスタディーツアーが行われムシキー村を訪れます。布についての御質問、御意見ぜひお聞かせ下さい。村の女性達にも伝えていきたいと思ひます。

松本祐子(学生・神戸市)

ダジャレに続く、隠れた才能の一端を披露。

事務所ビル同階の結婚相談所の方が来訪、すわ若手3職員の縁談と思いきや、洗い場でPHD使用の廃油石ケンの購入法を聞かれる。その後各事務所の環境派洗剤が洗い場にズラリ。洗い場に芽生えた地球への愛。

神戸女子大の篠原滯子先生、草木染めの資料を手に来訪。アドバイス頂く。

インドジャティ神戸公演実行委員会の実力派若手が準備作業で連夜ガンバル。



編集後記

僕にとってPHDは第三世界に関心を持ち、実際に動き出した僕の始めの一步をやさしく迎えてくれた所でした。

この一步は傍目から見れば本当に小さな一步かもしれないけれど、僕にとってのこの一步はいつも考えるだけで動くことのできなかつた臍甲斐無い自分に対する抵抗でもあったのです。PHDのドアを初めて開ける時、ものすごくビビりました。何故かという、誰も知人はいな

いし、僕みたいな何もしらずにのこのことやって来たやつを受入れてくれるかとても不安だったからです。でも戸を開け中に入ってゆくとみんなは僕を優しく迎えてくれました。もし、あの時、あんな風に迎えられなければ僕は、また昔の自分に逆戻りしていたかもしれません。あれ以来僕は自分で正しいと思ったことをとにかくやってみることって大事だと思ふようになった。

PHDにはいろんな人達がやって来てやさしさを持ち寄っています。それぞれの個性や特技を生かしながら...

このレターもいろんな人が集い、発行されています。人が集い力を合わせればきっと何かを生み出せるってことを、編集後記を書くにあたって感じました。1人で1枚のビスケットを全部食べる時のおいしさよりも、2人で半分ずつ分け合って食べた方が倍おいしく思えるという“人の心の暖かさ”の実践の場がPHDだと確信しています。だからPHDっていう存在がいつまでもあり続けて欲しいです。(トシ)

編集メンバー
赤松恵美子 坪光子 伊藤洋子 今出敏彦
得原輝美 柿原登志夫 川那辺裕子
児島章一 芝美代子 田中裕美 林真菜

新規会員・寄付者ご芳名は、 個人情報保護のため 掲載しておりません。



岩波新書の新刊で松井やよりさんが「市民と援助」という本を見付け、一気に読みましたが世界各国のNGOや開発教育のことが詳しく書かれており大変参考になりました。
—「第3世界ショップ」の章をPHDのパザールメンバーと参考にしています。
大阪府 奥村 功

タイの布を有難うございます。織る人々の様子を思い浮かべながら、タイの人々がまた世界中の人々が幸せになれることを祈りながら拝見致しております。
東京都 山村 多栄子

当社取引先の方が日本に見えた時、PHDの素敵なTシャツを差し上げたり、その他いろいろお世話をしましたので送りながら、PHDに御寄付をお願い行かれましたので送ります。
—4年程前、研修旅行の道中泊めていただきました。皆さんお元気ですか？
千葉県 高木 克則

ご寄附に対する免税の特典

当法人は特定公益増進法人としての認定を得ていますので、ご寄附に対する下記のような特典があります。

寄附者が個人の場合

寄附金合計額(所得金額の25%未満)マイナス1万円
寄附金控除額(所得総額から控除できる額となります)
(例)1000万円の所得の人が250万円を寄附されると、249万円の寄附金控除。

寄附者が法人の場合

寄附金合計額が一般寄附損金算入限度額の2倍未満までが損金扱いとなります。
(例)資本金10億円、その年の所得が3億円で1年決算の会社の寄附金の損金算入額は1,000万円未満まで(一般では500万円)

ロータスクーポン・グリーンスタンプ・ブルーチップ
1990年8月7日～10月22日

〈兵庫県〉 北淡町立富島小学校
〈広島県〉 山田信子
〈山口県〉 松本 徹

